

# コミケット 30年のあゆみ

- C1～11

- 初期のコミケット—

- C12～18

- 川崎市民プラザを中心に—

- C19～30

- 第1期晴海—

- C31～39

- TRC・第2期晴海・幕張—

- C40～49

- 第3期晴海—

- C50～67

- 有明ビックサイト以降—

- 参加者側からのコミケット

- サークル・コスプレ・設営・企業—

- 外側から見えるコミケット

- 新聞・雑誌報道・商業誌作品・アンケート—

- 主催する側からのコミケット

- 理念・準備会・システム—

## 70年代前半のマンガ状況

67年に創刊された『COM』（虫プロ商事）は、手塚治虫の「火の鳥」、石森章太郎の「ジュン」など新たなマンガの可能性を求める作品の連載を行ったマニア誌のハシリではあるが、それ以上にマンガ家予備軍やマニアたちを掴みえた要因は「ぐらこん」（グランドコンパニオン）というコーナーだった。そこには新人の投稿マンガが採点表付で掲載され、「自己表現」という形での実験マンガや青年マンガが若い世代の表現者によって次々と発表されていった。岡田史子、宮谷一彦、長谷川法世、青柳裕介……。それは60年代末という時代の中で、マンガを自覚的に自分たちの表現として捉えさせることになっていった。同時に、ここでは仲間たちよ集まれと呼びかけ、マンガ同人誌を作ること呼びかけていったのだ。『COM』を通して、67～70



第2回 日本漫画大会  
プログラムブック

第2回 日本漫画大会 プログラムブック 1973年7月発行

年にかけて、全国にマンガ研究会が生まれていった。また『COM』も同人誌の特集を行い、「同人誌大賞」を設けるなど、積極的に同人誌を応援していった。

しかし、70年に実質的に『COM』は休刊、71年に再刊するが、虫プロ商事の倒産と共に完全に消えていった。拠点を失ったマンガファンたちは、『COM』以後のマンガ状況をどう生きるか、様々な道を探っていくことになる。コミュニティの再構築を理論的に目指す“マンガコミュニケーション”、大阪という地でミニコミ的マンガ誌を刊行する「あっぷるこあ」、ちょっと遅れるが東京の同様の自前のマンガ誌を作っていくとする『漫波』『不思議な仲間たち』。そして、SF大会にならったファンイベント「日本漫画大会」、それに続く形での「マンガフェスティバル」、などなど。戦後マンガ世代による、運動体的マンガ活動は72年から75年にかけて、様々な形で起こり、活発化していった。

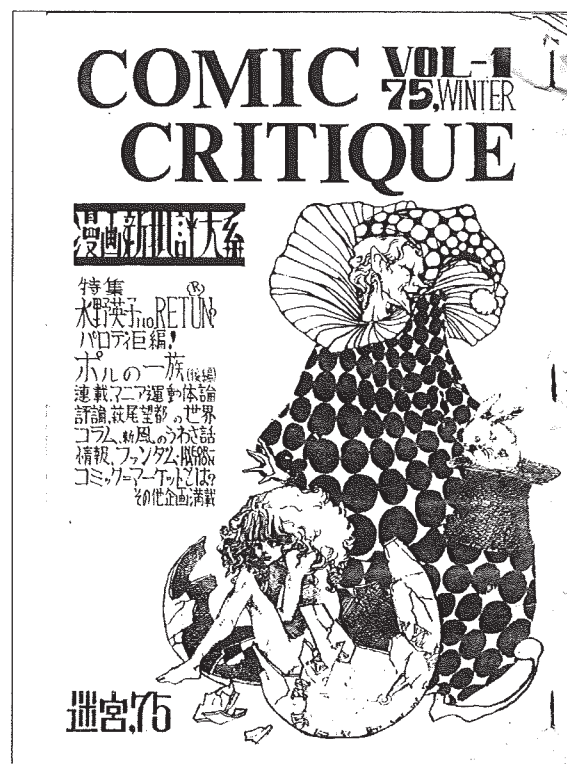
その背景には、石油ショック後のマンガ雑誌の後退があった。先鋭的だった青年マンガ誌は自閉し、成長し常に前衛たろうとしていた『少年マガジン』などの少年誌は内容を低年齢化させ、かつて次々と新たな驚きを提供していた『ガロ』も低迷し、スポ根やアクション物が本流となっていた。実験マンガや革新的な表現は誌面から消えていった。それはマンガの可能性を閉ざしていくとする状況にも見えたのだ。そんな中、少女漫画において、萩尾望都、竹宮恵子を始めとする『COM』世代の新人たちの作品が、新たな可能性としてほの見えていた。

これが75年の状況だ。

## 迷宮の結成とその始まり

75年4月、迷宮が結成される。大阪の「あっぷるこあ」で「漫画ジャーナル」という批評活動を行っていた亜庭じゅん氏が東京に就職で出てきているということで、「モトのトモ」の原田央男氏から声がかかり、会って話している中で、グル

ープ結成はいつの間にか決まっていた。その席には京大SF研のI氏、評論誌「いちゃもん」の式城京太郎氏も同席しており、協力してくれるようになった。迷宮は場であり、拘束されるグループ同人という形はとらないなど、自由なネットワークを目指していた。が、形としては3人を中心として動き出していたようだ。



漫画新批評体系 VOL1 1075年7月発行

迷宮75は、とりあえずマンガ批評誌の創刊、新たな形でのイベントの創出を2本の柱にして、批評集団として活動することを目的に、毎週集まり、その活動内容を検討することになった。場所は新宿丸井の屋上。そこは只で利用でき、水が飲み放題だったのだ。その後集会場所は、新宿カトレア、渋谷バラ苑と変わっていったが、毎回、色々な人間がやってきた。早稲田ミステリ、明大SF研、落書館、和光大漫研、まんの虫、戦後少女マンガ史研究会、

ショッカー、チャンネルゼロ、関東グラコン、いちゃもんなどのメンバーが入れ替わり参加し、マンガ・アニメ・SF・ミステリー・映画・音楽など様々な話題を語り合った。やがて川本耕次、青葉伊賀丸なども参加することになる。それはサロンでもあったのかもしれない。この集会は79年頃まで続けられた。

スタートしてまもなく、評論誌の名を『漫画新批評大系』にすることが決定する。当時全員がはまっていた山上たつひこの「喜劇新思想大系」にならったものだった。そして、山上と並んで、もっとも先鋭的だった萩尾望都。こまわり君とメリーベルをパロディ風に表紙にすることも決まり、創刊準備号を夏の日本漫画大会に合わせて発行しようということになる。まずは「宣言」を作ろうということで、各自が素案を持ち寄り、それを集約して亜庭氏による「迷宮マンガ宣言」が書かれることになる。迷宮は、新たなマンガ状況の創出に向けて動き出していた。そこに持ち込まれたのが、メンバーの友人でもあった女性が漫画大会への参加を拒否されたという事件だったのである。

## 漫画大会問題と機関紙創刊

迷宮が対しようとしていたのは、スポ根や学園ラブコメに堕ちた商業誌マンガであり、旧態依然のマンガ評論であり、BNF（ビッグネームファン）など自閉した遊びに堕ちいったマンガファンダムであり、また『COM』の幻影に引きずられているファンたちであり、何も考えていない新興の若い世代だった。全てを解体した上で、混迷の状況の中に新たなマンガ状況を創り出していくこと。その中には漫画大会や、コレクターたち中心のマンフェスへの決別の意思も含まれていた。そして、そうした中で、状況に検証を加え、新たな芽を育てていくこと。

そこに持ち込まれた漫画大会参加拒否事件は、早急に手を付けなければならない問題でもあったのである。

——簡単に経緯を述べるなら、夏の漫画大会に申し込んだ女性が、申込書の裏に、昨年の漫画大会への批判を書いたところ、スタッフを侮辱したり、イベントを批判するようなファンは参加して欲しくないと、参加拒否されたこと。その後、再度の問い合わせにも誠意ある返事が来なかったということである。

迷宮では、まずこの問題から取り組むことを決め、「漫画大会を告発する会」を結成し、大会事務局に事情説明を始めた解答を求める文書を送付、同時に、この事件を知ってもらうためのチラシを作製することになる。この活動は、75年秋まで続き、漫画大会内においても話し合いを行うとともに、レポートなどを出し、76年に終わった。それは漫画大会に見切りをつけ、自らのイベントを早急にスタートさせなければという想いを強くさせることになった。だから

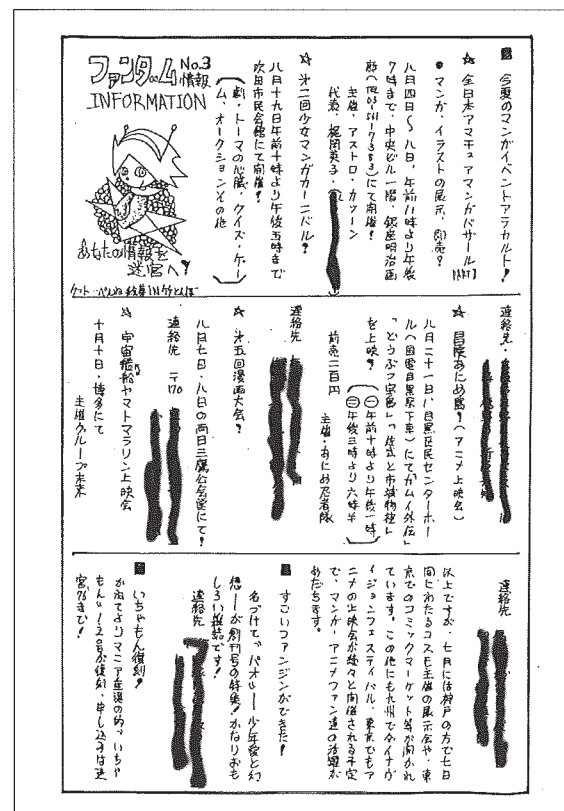
「漫画大会を告発する会」の運動がコミケットを生むきっかけの一つになったことはまちがいないのだが、それは1つの要因にすぎない。

『漫画新批評大系』はマンガ評論をメインに、マンガファンダムにおけるファンの運動を考える「マニア運動体論」、情報、そして読者にアピールするためのパロディなどを内容とすることになり、当時もっともファンに人気のあった「ポーの一族」を批評的視点でパロディにする「ポルの一族」を連載の核にする。また「漫画大会事件」も取り上げている。

迷宮の母胎の1つになった「モトのトモ」は萩尾望都研究会であり、「11月のギムナジウム」のダイナビジョン化（紙芝居風アニメ）を手がけていた。この上映会などにより、一つのネットワークが出来上がっていた。また3号を持って休刊し、迷宮に発展解消することになっていたマンガ情報誌「いちやもん」は、その最終号で「全国マン研リスト」を作成していた。こうした、並行して動いていた様々な活動が迷宮とコミケットに集約されることになっていくのだが、なんといっても力付けられたのは、青コピー誌で数百ほど作った『漫画新批評大系』が、漫画大会で完売したのみならず、予約購読者が百人以上も集まったことだった。上映会や様々な機会にチラシを置き、本を置き、という形で同誌は部数を伸ばしていき、オフセット誌にして書店販売も行っていた時期には二千部近く発行された。

### コミケットプロジェクト始動

この評論誌のささやかな成果を元に、イベント、コミックマーケットの開催に向けて迷宮が動き出すのは8月のことだった。期日は12月末頃。内容は、漫画大会の中でもっとも楽しく、意味のあったファンジン即売ブースを発展させた同人誌即売会。そこに、ファンをメインにしたイベント企画を入れ、プロの力を借りたり、「先生」を呼んだりしないこ



漫画新批評大系 1976年7月発行より

とを明確にした、ファンによるファンのためのファンのイベントとする。代表、申し込み先を原田氏のところに置く。実質的には、ぼくと式城京太郎氏で会場取りなどに動くことなどが決まる。告知は『漫画新批評大系』、友好関係にあった同人誌や、再生した「関東グラコン」など。また『びあ』『別冊少女コミック』などに情報を送ることになる。参加の呼びかけは、前述の「全国マン研リスト」の中のサークルにダイレクトメールを送ることになった。申込書の発送は9月の終わり頃に行ったという記憶があるが、全てが印刷、手作業だった。

ところが、当初予定していた杉並産業会館が、抽選ではずれてしまう事態となる。物品販売できる会場は限られており、新たな会場を捜さなければならなくなったのだ。第一

回開催のお知らせのCMのいくつかが杉並産業会館で告知されているのは、そういう事情だ。当時「ビックリハウス」をやっていたパルコ、デパートの屋上などで出来ないかということで話にいったが、海のものとも山のものともつかぬイベントにのってくれるところなど何処にもなく、期日が迫る中、少々会場費は高いが、ということで虎ノ門の日本消防会館を借りることができたのは10月に入ってからだった。

迷宮を始めるに当たってメンバーは、3,000円ずつ最初に出している。コピー機の購入などにあてるためだ。その後、資金となったのは本の売り上げ、予約金だった。コミケットも迷宮から借金しながら77年頃までは開かれることになっていく。それと、当日集まったカンパによって、なんとなっていたというのが実状である、準備会が立ち上がったから、迷宮への借金は残ったままの形となり、コミケット永久スペース提供という約束が交わされ、それは今も続けられている。

### 始まりの始まり

11月頃にはサークルからボツボツと申し込みが来始めていたが二十を少し越す程度でしかなく、関係サークル、友人サークルなどに声をかけ、委託を受け入れるなどして、なんとか32を確保。また、同人誌即売会だけでは6~8時間持たないだろうということで、人気のあったダイナビジョンの上映会、懐漫合唱大会、赤字救済モトクジ(50円でヘッドガービナップを売り、抽選で『ケーケーケーキ』が当たると、古本バカ安叩き売り(漫大のオークションへの反発で行ったもの)などを企画している。

女子大マン研などをお願いしてやってもらった喫茶ルーム「コケット」は第2回から。この時購入したコーヒーカップは今も、ぼくは使っている。2回目には奇人クラブからの企画で「岡田史子原画展」も開かれている。——なんにしても、第1回目は、果たしてこうした内容のイベントに人が来



第4回 日本漫画大会秘公式レポート 1976年7月発行

てくれるのか、面白いと思ってくれるのだろうか、迷宮のメンバーはかなり不安を抱えていたことは事実だ。

だが、喫茶店カトレアで行われた、サークル集会には、入れ替わり立ち替わりサークルが参加し、打ち合わせをし、配置を決めて帰って行った。この喫茶店でのサークル集会は三回ほど続き、それ以後、区民会館を借りて行われるようになっていった。このときの雰囲気、何とかやれるのではと思ったのは、ぼくだけではあるまい。

コミケット坊やのキャラクターデザインをやってくれた鈴木君は迷宮に出入りしていた大学生で、自ら「MOB」を主催するなどの同人誌活動を行っていたが、ガリ版のテクニクがすごく、彼に第一回目のポスターをカラーで作ってもらうことになる。また、サークルには自己アピールのためのポスターを作ってもらい、当日会場内にはり出すなどした。印刷もコピーも高く、資金もなかった時代である。チラシなどはガリ版か青焼コピーだけだ。ミニコミ情報誌「裸木板」の紹介で共信印刷に印刷を頼むようになるのは76年秋、迷宮の増刊号「萩尾望都に愛をこめて」の印刷からである。

コミケットの準備は進んでいたが、このイベントは元々、金も手間ひまもかけず、参加者にかつてに盛り上がりもらえるイベントとして構想されたものであり、それほど準備のいるものはなかった。会場にある机イスを、みんなで並べて、準備して、みんなで片付け掃除して帰る。会期中は、全てサークルに自由にやってもらえればいい、というわけである。コミケットは「場」であるというのは、そうしたところからも出ていた。第1回目の開催日が近付くにつれ、迷宮はドタバタとしていた。イベントの目玉の一つは「漫画信批評大系」1号でもあったからだ。——前日、メンバーは集まってコピーを黙々と続けていた。1枚(2P)刷るのに40秒、1冊100ページ近い。刷って乾かして折ってホッチキスでとめる。1冊作るのに20分はかかる。もちろん、原稿を書き、それをトレーシングペーパーに書いたコピー用原稿を作るという作業

もあったが、さすがにそれは終わっていた。コミケット当日に間に合わせるために、みんなで徹夜でコピーと作業が行われていた。出来上がった百数十冊を抱えて、会場に向かったのは、朝だった。——備品など袋2つ、3つである。既に会場の前には、サークルが集まっていた。主催者はわずかに遅刻である。そして鍵を借りて会場へ。小さな区民会館のようなフロアである。誰かが「こんなものかあ〜」と言ったのが聞こえた。そう、こんなものなのである。そこを作り、埋め、中身を作っていくのはサークルだ。——みんなで作り、スタートしたコミケット第1回目。大赤字だったが、カンパも集まり、何処のサークルもそれなりに売れ、来場した人たちも、マンガファンと1日過ごし、疲れと共に帰っていく。反省会、後片付、予約者用のコピーなどがこの後、メンバーには待っていたのだが、とにかく、こうやってコミックマーケットはスタートしたのである。

# 迷宮の全活動

<p>一九七五年四月 批評信批評大系結集</p> <p>六月 マンガ大系を発売する</p> <p>七月 雑誌「漫画信批評大系」を創刊</p> <p>八月 少年漫画「アサヒ」の発行</p> <p>九月 マンガ大系を再編集</p> <p>十月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>十一月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>十二月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>一九七六年二月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p>	<p>四月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>五月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>六月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>七月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>八月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>九月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>十月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>十一月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p> <p>十二月 雑誌「漫画信批評大系」の発行</p>
--	--

